

ない群にわけた。

第Ⅰ因子は日常性のある食用頻度の高い蛋白質性食品が高い値を示した。これは栄養的に重要であると考えられるからであろうか。

第Ⅱ因子は日常よく使用され好まれる食品とそうでない食品では逆の値を示した。

A-86 食品に対するイメージ測定
S-D 法による嗜好調査の試み——

広島大教育 伊藤 富美
比治山女短大 ○中尾 郁子

1. 食品に対する嗜好調査は従来、質問紙を用いて行なわれた研究が多い。本研究は、個人のもつ嗜好によって異なるであろうと考えられる各食品に対するイメージを把握しようとして、S-D法を用いてその測定を試みたものである。

2. とり上げられた16個の食品は予備調査にもとづき、嗜好とポピュラリティから選び出されたものである。スケールは食品に関係あると思われる20の形容詞対について7段階で評価させた。対象は女子の中学生、高校生各100名及び大学生94名計294名である。

3. 食品のプロフィール、Dスコア及びセントロイド法による因子分析によって結果を求めた。形容詞対における好き——嫌いによって食品に対する嗜好群とそうで